福島県立図書館報

第55巻第2号（通巻259号）

「いつも通り」にプラス　ワン

八巻　義徳

今、過去の延長線上の連続したものと、過去の経験則では説明できない不連続なものが混沌としている。連続したものであれば、過去のノウハウが使える。不連続なものは、「やってきたこと」、「習ってきたこと」が頼りにならないが、連続にない飛躍のチャンスがある。

ここに、生徒数が減少し、予算も増えない学校図書館がある。さらに、娯楽色の強い雑誌を少なくした。その図書館に活気がある。入館者数、貸し出し数で、十五年度の下期は、前年度比二桁（入館者１２８％、貸し出し１１８％）の伸び、十六年度に入ってもその勢い（上期:入館者１４６％、貸し出し１２２％）が続いている。それは、福島南高校・福島中央高校の図書館である。

そこには、成り行きではなく、目標を持った努力がある。年間の開館日を増やし、開館時間を延ばした。学校掲示板、図書館便りに新刊、お薦め本の案内が踊っている。入口に手作り掲示板を付け、書棚のレイアウトも変えた。発信する情報の量が増え、質が進化した。親切さに工夫とスピードが加わった。それが過去にない入館者数と貸し出し数となっている。

この中心的な役割を果たしたのは、図書主任と司書である。新鮮な資料の選択と収集、利用者へ素早いサービスを心がけている。生徒もお手伝いからスタッフに変化した。彼らは、「利用者本位」の思索、知恵、閃きを生徒、教職員に発信し、「感謝」と「達成感」を受信した。

図書館は、学校でも、地域でも、必需品である。そこでは、本を蓄え、借りたい人に本を渡し、返却本を受け取る。この業務が連続して行われる。その「いつも通り」の業務に新しい工夫と努力が加わると、必需の程度が上がる。「いつも通り」にプラス　ワンの努力が、図書館が必需品であることを再認識させる。

現在、福島南高校は、「もっともっと信頼される学校づくり」「もっともっとわかりやすい学校づくり」によって「もっともっと満足」を創る挑戦をしている。これは、既存の施設で新たな価値を産み出す運動であり、スタッフの行動の基点を利用者に移す運動である。それが、「いつも通り」にプラス　ワンとして始まっている。

八巻　義徳（やまき・よしのり）

一九五一年、飯舘村生まれ。岩手大学農学部獣医学科卒業。

雪印乳業入社後、獣医師、ヨーロッパ事務所長兼雪印フランス社長、経営企画室部長などの立場で多彩な業績を残した。

二〇〇三年、県内初の「民間人校長」として、福島南・福島中央高に就任。

福島県立図書館協議会委員